

天理市文化財調査年報

平成18年度

柳本藩邸遺跡（第11次）

平等坊・岩室遺跡（第30次）

2008

天理市教育委員会

例 言

- 1, 本書は天理市教育委員会が平成18年度に実施した文化財に関する事業の概要をまとめたものである。
- 2, 本市教育委員会はこれまで市内遺跡の発掘調査概要報告書を、個人住宅建設に伴う調査等とそれ以外の調査の2シリーズに分けて下記のとおり刊行してきた。

個人住宅建設に伴う調査等	それ以外の調査		
天理市埋蔵文化財調査概報 森本・塚之庄遺跡(高平地区)	平成2年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和58・59年度	昭和60年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 乙木・梅垣遺跡	平成2年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和60年度	昭和61年3月
天理市埋蔵文化財調査概要報告 1990年度	平成3年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和61・62年度	平成元年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 1991年度国庫補助	平成4年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 昭和63・平成元年度	平成4年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成4年度・国庫補助調査	平成5年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成2・3年度	平成5年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成5年度・国庫補助調査	平成6年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度	平成8年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成6年度・国庫補助事業	平成7年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度	平成10年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成7年度・国庫補助事業	平成8年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成8・9年度	平成15年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成8年度・国庫補助調査	平成9年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成10・11・12年度	平成17年3月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成9年度・国庫補助事業	平成10年3月	天理市埋蔵文化財調査概報 平成13・14年度	平成19年12月
天理市埋蔵文化財調査概報 平成10年度・国庫補助調査	平成11年3月	※続刊は作成中。	
天理市埋蔵文化財調査概報 平成11年度・国庫補助事業	平成12年3月		
天理市埋蔵文化財調査概報 平成12年度・国庫補助事業	平成13年3月		
天理市埋蔵文化財調査概報 平成13年度・国庫補助事業	平成14年3月		
天理市埋蔵文化財調査概報 平成14・15年度・国庫補助事業	平成15年3月		
天理市埋蔵文化財調査概報 平成16年度・国庫補助調査	平成16年3月		
※平成17年度は対象事業なし。			
天理市文化財調査年報 平成18年度	本書		

平成18年度以降の個人住宅建設に伴う調査等については、上記左のシリーズに後続する『天理市文化財調査年報』（本書）に収録する。それ以外の調査については、上記右のシリーズに後続する『天理市埋蔵文化財調査概報』として従来どおり刊行を続ける予定である。このほか、単冊の調査概報や調査報告（第8集まで刊行済）も必要に応じて刊行する予定である。

- 3, 現地調査から遺物整理作業及び本書作成に至るまで下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表する。
 小野間智子（奈良教育大学）、笹田幸佑（奈良教育大学）、松本吉弘（京都大学）、
 安原貴之（天理大学）、芳村信芳、中森軍之助、中森富美代、河喜多淑子、松本真並、藤岡早希、
 青木勘時、松本洋明（天理市教育委員会）（所属は当時のもの）
- 4, 現地調査、出土遺物及び類別等について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して謝意を表する。
 甲斐猛（大分市歴史資料館）、小池香津江・吉村和昭・奥山誠義（奈良県立橿原考古学研究所）、
 坪根伸也（大分市教育委員会）、瀧本正志（福岡市教育委員会）、田中正弘（葦山町教育委員会）、
 藤田三郎・豆谷和之（田原本町教育委員会）、山崎頼人（小郡市教育委員会）、森下弘（古賀市教育委員会）、山中英彦・山口裕平（(財)行橋市文化振興公社）
- 5, 本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田人輔・北口聡人が編集した。調査概要はそれぞれ調査担当者が執筆した。

目 次

例 言

目 次

第1章 平成18年度 事業の概要 1

第2章 平成18年度 個人住宅建設に伴う調査・範囲確認調査の概要

柳本藩邸遺跡（第11次） 石田大輔 5

平等坊・岩室遺跡（第30次） 北口聡人 13

付論 平等坊・岩室遺跡出土の板状鉄斧について 北口聡人 20

図 版

抄 録

第1章 平成18年度 事業の概要

I. 埋蔵文化財の調査

1. 埋蔵文化財発掘届・通知

平成18年度に本市教育委員会を経由した、文化財保護法第93条にもとづく埋蔵文化財発掘届および同法第94条にもとづく埋蔵文化財発掘通知の件数は以下のとおりである。

第1表 平成18年度 埋蔵文化財発掘届および発掘通知件数

	埋蔵文化財発掘届 (法第93条)	埋蔵文化財発掘通知 (法第94条)		発掘調査	工事立会	慎重工事
平成18年度 (2006年度)	106	15	県教委通知	17	90	14

※県教委通知件数には次年度以降に対応するものや県教育委員会が対応するものを含みため、下記の調査件数等とは一致しない。

2. 発掘調査

平成18年度は8件の発掘調査をおこなった。本書では4柳本藩邸遺跡第11次、8平等坊・岩室遺跡第30次について概要報告をおこなう。それ以外の調査については、別途概報を刊行する予定である。

第2表 平成18年度 発掘調査一覧

	名称	住所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概要
1	平等坊・岩室遺跡 第28次	平等坊町208他	宅地造成	450㎡	平成18. 5. 15 ～ 7. 15	青木 石田	弥生時代前期～中期：大溝、井戸など
2	成願寺遺跡・ ホツリ塚古墳	笠生町1095他	市道建設	100㎡	平成18. 6. 12 ～ 7. 18	北口	弥生時代中期～後期：溝など
3	願興寺跡	和置町629他	農業施設	144㎡	平成18. 7. 31 ～ 8. 14	北口	奈良時代：願立柱建物など
4	柳本藩邸遺跡 第11次	柳本町782他	個人住宅	27㎡	平成18. 8. 7 ～ 8. 24	石田	江戸時代後期：石垣、河川など
5	平等坊・岩室遺跡 第29次	岩室町38他	公園整理	750㎡	平成18. 10. 10 ～ 19. 2. 11	青木	弥生時代前期～古墳時代前期： 大溝、井戸
6	合徳遺跡 第6次	西井戸堂町405-1他	学校	310㎡	平成18. 10. 30 ～ 12. 15	北口	中世：井戸 古墳時代後期：河川
7	平等坊・岩室北遺跡	荒崎町283-1他	ため池改修	430㎡	平成18. 11. 22 ～ 12. 26	石田	河川
8	平等坊・岩室遺跡 第30次	岩室町アタラシ223	範囲確認	70㎡	平成19. 2. 19 ～ 3. 19	北口	溝、土坑

3. 試掘調査

平成18年度は3件の試掘調査をおこなった。概要は以下のとおりである。

第3表 平成18年度 試掘調査一覧

	名称	住所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概要
a	中町西遺跡	中町120他	宅地造成	6㎡	平成18. 7. 24	石田	遺構なし
b	向山遺跡	柳本町3408-1	その他建物	2㎡	平成18. 8. 2	松本	遺構なし
c	柳本遺跡	柳本町2036-1	その他建物	5㎡	平成19. 1. 26	石田	河川

II. 史跡整備

史跡赤土山古墳整備事業を実施している。

Ⅲ. 普及・啓発

1. 埋蔵文化財特別展示

文化財課がおこなっている発掘調査の成果を広く市民に紹介するために、「発掘の現場から一地下に眠る天理の昔々」と題する埋蔵文化財特別展示を平成18年度より開始した。夏季・冬季の年2回開催で、夏季は時代や分野を特集した企画展、冬季は前年度の調査成果速報展をテーマに今後展示を実施していく予定である。今年度は第1回、第2回を開催した。

①平成18年度夏の文化財展『大和古墳群の埴輪と土器』

これまでの調査で大和古墳群から出土した埴輪や土器を中心に、古墳時代前期をテーマとした特別展示をおこなった。

展示内容 西殿塚古墳、東殿塚古墳、波多子塚古墳、マバカ西古墳 出土遺物

期 間 平成18年8月9日～8月23日

会 場 天理市文化センター1階展示ホール

②平成18年度冬の文化財展『平成17年度発掘調査速報展』

平成17年度中に天理市教育委員会が実施した発掘調査4件の成果を速報展示した。

展示内容 平等坊・岩室遺跡第25-2次、平等坊・岩室遺跡第26次、
平等坊・岩室遺跡第27次、成願寺遺跡 出土遺物

期 間 平成18年12月6日～12月21日

会 場 天理市文化センター1階展示ホール



『平成17年度発掘調査速報展』

2. 普及・啓発

天理っ子遺跡探検隊

小学生を対象として市内の遺跡や古墳をめぐるハイキングを、平成17年度より教育委員会生涯学習課と共催している。クイズやゲームを取り入れて、文化財に関する知識が深まるよう工夫している。本年度は第2回目で、本市北部の白川池周辺をめぐる。

日 程 平成18年11月18日（土）

行 程 JR樺本駅→赤土山古墳→高塚遺跡→白川池→ウワナリ塚古墳→JR樺本駅

参 加 者 小学生・保護者 計14名



遺跡探検隊（赤土山古墳にて）

3. 刊行図書

平成 18 年度は下記の図書を新たに刊行した。

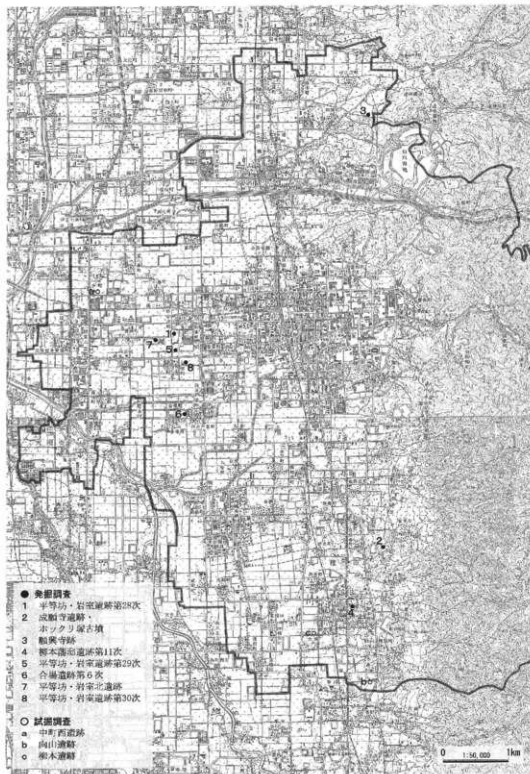
・天理市埋蔵文化財調査報告第 8 集「波多子塚古墳」 平成 19 年 3 月 30 日

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 2 平成 18 年 7 月 31 日

埋蔵文化財センターの業務を紹介する冊子である。Vol. 2 では、平成 18 年度夏の文化財展にあわせて、大和古墳群の埴輪と土器を特集した。

・天理市埋蔵文化財センターだより Vol. 3 平成 18 年 11 月 30 日

Vol. 3 では、平成 18 年度冬の文化財展にあわせて、平成 17 年度中におこなった 4 件の発掘調査成果を紹介した。



第1図 平成18年度 発掘調査・試掘調査地点

第2章 個人住宅建設に伴う調査・範囲確認調査の概要

柳本藩邸遺跡（第11次）

I. はじめに

今回の調査は、柳本町内で計画された個人住宅建設に伴い実施した。調査に際しては、住宅建設予定地の北側に東西10m、南北2.5mの長方形の調査区を設定した。現地は既存建物の解体後に整地された状態であったため、重機により整地土を除去した後、人力による掘削に移行した。最終段階で調査区の南東隅を部分的に拡張したため、最終的な調査面積は約27㎡となった。調査は平成18年8月7日より開始し、同年8月24日にすべての作業を終了した。

II. これまでの調査

柳本藩邸遺跡は、江戸時代柳本藩の邸宅とそれに付随した武家屋敷等を含む城下町一帯を内包する遺跡である。同遺跡の範囲内には古墳時代前期の前方後円墳である黒塚古墳（全長約130m）が存在する。これまでに11ヶ所の調査がおこなわれ、時代とともに移り変わった柳本藩邸の姿が次第に明らかになってきている。今回の調査地は黒塚古墳の北側で、柳本藩邸遺跡の北西部に当たる。同遺跡内では従来調査の及んでいなかった部分であり、本来の柳本藩邸の範囲内ではないものの近世柳本集落の痕相を知る手掛かりを得ることが期待される地点である。なお、柳本藩邸遺跡の北側隣接地では、柳本遺跡群竹ノ尻地点として3次にわたる調査を実施しており、今回の調査地はむしろこちらに近い。柳本藩邸遺跡と柳本遺跡群竹ノ尻地点の調査実績については以下のとおりである（第4表・第2図）。

黒塚東遺跡調査 奈良県立橿原考古学研究所が黒塚東遺跡として調査を実施したもので、柳本藩邸遺跡内における調査の嚆矢である。調査地点は柳本藩邸北門推定地付近で、近世柳本藩邸の先駆となる中世地割、近世の井戸・区画溝が確認された。このほか、縄文時代後期の土器包含層、古墳時代前期の土坑、溝も検出している。

柳本藩邸遺跡第1次 天理市教育委員会による最初の調査である。調査地点は現在の柳本小学校敷地内で、柳本藩邸の屋敷地に該当し、「御殿」の名称を残す。調査では中世楊木氏に関連するとみられる遺構や近世の整地土層を検出した。整地土層は文政13（1830）年の火災後に形成されたものと考えられている。

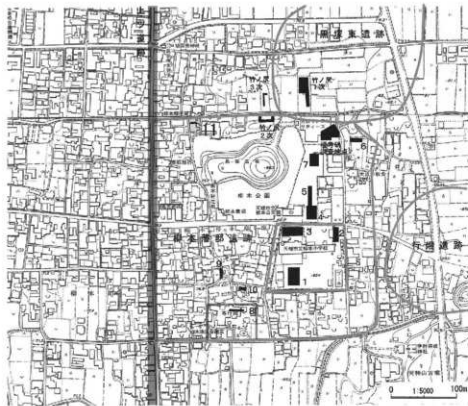
柳本藩邸遺跡第2次 第1次調査に続いて柳本小学校敷地内で実施された。調査では文政13（1830）年の火災による焼土面や、寛永年間（1624～1644）の藩邸造営時の整地面を検出している。

柳本藩邸遺跡第3次 同じく柳本小学校内で実施した調査である。3mに及ぶ堆積土を取り除いたところ、地山直上で石組遺構を検出した。堆積土には江戸時代末期の日常雑器が含まれていることから、藩邸終焉の時期にも大規模な整地がおこなわれたことが知られる。

柳本藩邸遺跡第4次 柳本公園整備に伴う調査で、17～19世紀の遺構群を検出した。18世紀中葉以降に藩邸と外部の境に土塁や区画溝が築かれ、19世紀中葉には石垣を築いて平坦地形を作り出していた。このことから、19世紀中葉を境に、それまでの自然地形を取り入れた姿から、石垣による区画がなされた城郭へと藩邸の景観が変化したことが明らかになった。

第4表 榑本藩邸遺跡における調査一覧（近傍地点を含む）

次数	期間	面積	調査原因	調査士名	調査担当	文献
調査準備	昭和57年1月18日 ～3月16日	520㎡	教育文化 保存施設	榑考研	今尾文昭	今尾文昭1983『黒塚東遺跡』『奈良県遺跡調査概報』1981年度第2分冊 奈良県教育委員会
第1次	昭和59年4月23日 ～6月18日	230㎡	榑本小学校 屋内掘削	天野吉	泉武	泉武1985『榑本藩邸跡』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和59・60年度 天理市教育委員会
第2次	昭和60年7月22日 ～7月27日	80㎡	榑本小学校 校舎	天野吉	泉武	泉武1986『榑本藩邸跡(第2次)』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和60 年度 天理市教育委員会
第3次	昭和60年5月11日 ～7月26日	110㎡	榑本小学校 ゾール	天野吉	泉武	泉武1988『榑本藩邸跡(第3次)』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和61 ・62年度 天理市教育委員会
第4次	昭和60年9月5日 ～11月25日	400㎡	公園整備	天野吉	松本洋平	松本洋平1992『榑本藩邸跡(第4次)』『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和63 ・平成元年度 天理市教育委員会
第5次	平成2年8月6日 ～9月30日	130㎡	公園整備	天野吉	松本洋平	松本洋平1993『榑本藩邸跡(第5次)』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成2 ・3年度 天理市教育委員会
第6次	平成11年10月1日 ～10月20日	80㎡	個人住宅	天野吉	青木昭時	青木昭時2000『榑本藩邸跡(第6次)の調査』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成11年度・国庫補助事業 天理市教育委員会
第7次	平成12年4月18日 ～7月6日	250㎡	黒塚古墳類 発掘	天野吉	泉武 松本洋平	泉武2005『黒塚古墳類発掘調査中継地帯の調査』『史跡志摩古墳群発掘事業 報告書』天理市教育委員会
第8次	平成12年9月18日 ～10月2日	40㎡	寺院跡	天野吉	青木昭時	青木昭時2006『榑本藩邸跡(第8次)』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成10 ・11・12年度 天理市教育委員会
第9次	平成12年4月12日 ～5月17日	12㎡	個人住宅	天野吉	松本洋平	松本洋平2005『榑本藩邸跡の調査』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成10年度・国庫補助事業 天理市教育委員会
第10次	平成12年2月18日 ～3月17日	60㎡	個人住宅	天野吉	青木昭時	青木昭時2005『榑本藩邸跡(第10次)の調査』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成16年度・国庫補助事業 天理市教育委員会
第11次	平成12年8月7日 ～8月16日	27㎡	個人住宅	天野吉	石田大輔	本書
竹ノ尻 第1次	平成3年2月4日 ～3月19日	420㎡	歴史住宅	天野吉	青木昭時	青木昭時1993『榑本藩邸跡竹ノ尻地点』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成2 ・3年度 天理市教育委員会
竹ノ尻 第2次	平成6年8月6日 ～9月20日	130㎡	個人住宅	天野吉	青木昭時	青木昭時1995『榑本藩邸跡竹ノ尻地点』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成6年度・国庫補助事業 天理市教育委員会
竹ノ尻 第3次	平成7年8月22日 ～8月31日	50㎡	個人住宅	天野吉	青木昭時	青木昭時1996『榑本藩邸跡竹ノ尻地点(第3次)の調査』『天理市埋蔵文化財調査概報』平成7年度・国庫補助事業 天理市教育委員会



第2図 調査地点位置図

柳本藩邸遺跡第5次 第4次調査地の隣接地で実施した調査である。調査区内は砂層が3m以上堆積していたことから、19世紀中葉におこなわれた藩邸の改修以前には、藩邸と黒塚古墳の間に谷地形が存在したことを確認することができた。

柳本藩邸遺跡第6次 柳本藩邸北東端で実施した調査である。武家屋敷等の明確な遺構は認められず、『柳本陣屋絵図』の記載に合致した。調査では中世以前の遺構も確認しており、黒塚東遺跡の調査成果とあわせて、中世土家の居館あるいは城館の存在が考えられている。

柳本藩邸遺跡第7次 天理市立黒塚古墳展示館の建設に先立って実施した調査である。区画溝や井戸を検出したが、『柳本陣屋絵図』には対応する土地区画は見えない。出土遺物は19世紀以降のものが中心で、見つかった遺構は絵図が描かれたあとの状況を反映している可能性もある。

柳本藩邸遺跡第8次 柳本藩主織田家の菩提寺である専行院の本堂建て替えに伴う調査である。専行院創建時に削平が及んでいたが、中世後期頃の小穴群や古墳出現前後期の土坑を検出した。

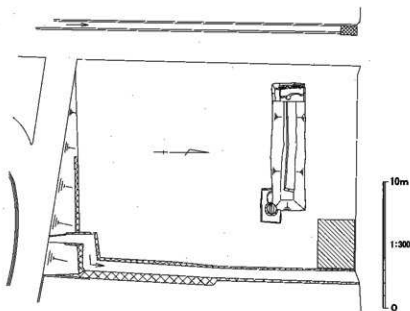
柳本藩邸遺跡第9次 柳本陣屋の西端にあたる地点で個人住宅建設に伴い実施した調査である。『柳本陣屋絵図』に見える大溝を確認した。

柳本藩邸遺跡第10次 第9次調査地の近隣で個人住宅建設に伴い実施した調査である。近世後半の溝や土坑を検出した。その下層には弥生時代後期末～古墳時代前期の遺物包含層が認められた。

柳本遺跡群竹ノ尻地点第1次 建売住宅建設に伴い実施した調査である。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の土坑や住居跡を検出したことから、当該時期の集落の存在が想定されている。また、調査区南端では縄文後期の土器片を含む自然河道を確認した。

柳本遺跡群竹ノ尻地点第2次 個人住宅建設に伴う調査である。顕著な遺構・遺物は認められなかったものの、竹ノ尻地点第1次調査区で確認された自然河道の下流部分を検出した。

柳本遺跡群竹ノ尻地点第3次 個人住宅建設に伴う調査である。明確な遺構は検出されなかったことから、竹ノ尻地点第1次調査で確認した集落が小規模であったことを示すと考えられている。



第3図 調査区位置図

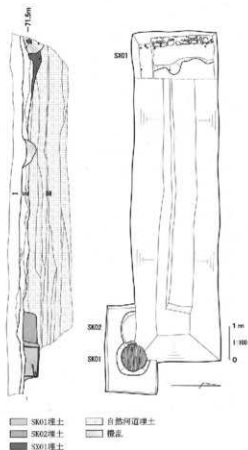
Ⅲ. 調査の概要

1. 層序 (第4図)

第Ⅰ層は褐色砂質土で、現代の建物解体後の整地上層である。第Ⅱ層は黄灰色砂質土が主体で、遺物をほとんど含まず、既存建物建設以前の近代の整地上であると考えられる。第Ⅱ層を除去した後、第Ⅲ層上面で石垣SX01、土坑SK01・SK02を検出した。第Ⅲ層以下はすべて自然河道に伴う堆積で、粗砂～シルトが層厚1.5m以上にわたって堆積している。地表から約2mの深さまで掘削したが、河床を検出することはできなかった。第Ⅲ層は湧水がきわめて多く、作業上の安全を考慮してさらなる掘削は断念した。

2. 主要な遺構 (第4図)

石垣 SX01 調査区東端の第Ⅲ層上面で溝状の落ち込みと石垣を検出した。石垣は根石のみ残る状態で、西側に面を揃えて南北に並べられていた。また、調査区南壁寄りには攪乱により壊されていた。根石は人頭大の川原石で、根石列の背後にあたる東側には石垣の裏込めとみられる礫が多量に入



第4図 調査区平面図・土層図

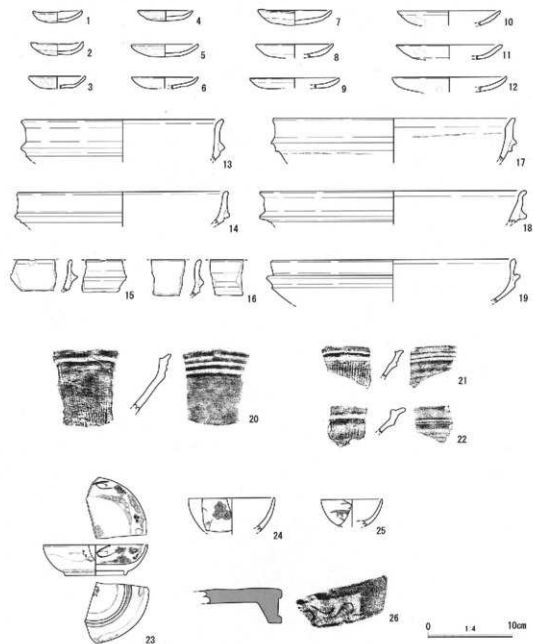
れられている。根石列の標高はおおよそ71.3mであるが、調査区東壁には71.6m付近まで裏込めの石材が確認できる。根石列の前面及び直下には木杭が複数打ち込まれており、石垣を構築する際に用いたものと考えられる。石垣の前面や裏込めから、土師器皿、炮烙、陶磁器、瓦などが出土した。

土坑 SK01・SK02 調査区南西端の第Ⅲ層上面で検出した。SK01には径75cmの木桶が埋められており、水溜とみられる。底板は4枚の板で構成され、その上に幅12cmの側板を21枚連結して載せている。木桶側板上部はいずれも同じ高さで折れており、本来の側板の高さは分からない。第Ⅲ層上面と木桶側板の折損箇所の高さはほぼ一致しており、SK01の掘削面はすでに削平されていると考えられる。木桶と土坑壁との間には裏込めの小礫が充填されていた。石垣 SX01 と同時期かそれ以降のものであろう。SK01・SK02からは陶磁器、瓦などが出土した。

自然河道 第Ⅱ層を除去すると、調査区内の全域で自然河道に伴う堆積(第Ⅲ層)を確認した。堆積状況からみて河道は東西方向に流れている。遺物の出土はごくわずかで、第Ⅲ層の最上面で須恵器片2点が出土したほか、第Ⅲ層上半から盃状の銅製品が出土したにすぎない。標高70.1mまで掘削したが、河床を検出することができなかった。

IV. 出土遺物

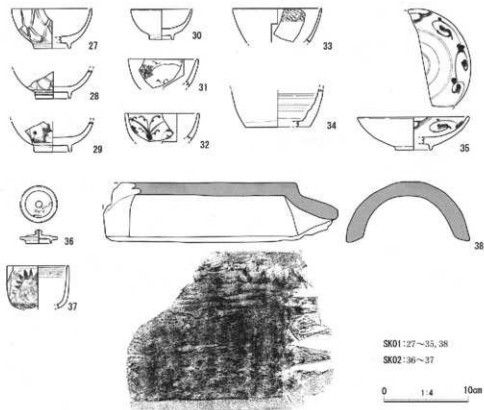
出土遺物は江戸時代後半頃のもの大半を占め、それ以前の遺物は自然河道の堆積層にわずかに土器片などが含まれていたにすぎない。総量は一般的な遺物コンテナ6箱程度である。第5表に計測結果を示した。



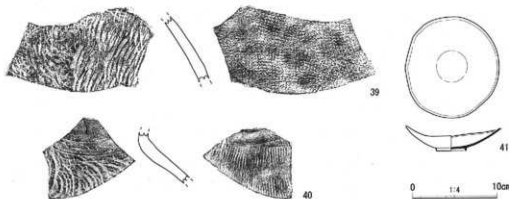
第5図 SX01 出土遺物

石垣 SX01 出土遺物 (第5図1~26) 土師器皿、埴輪、摺鉢、陶磁器、瓦が出土している。瓦が最も多量であるが、丸瓦・平瓦が主体で棧瓦と認められる個体はない。1~12は土師器皿である。法量は口径6.0~13.9cmで個体による差が大きい。13~19は埴輪である。いずれも断面三角形の貼り付け突帯を持つもので、難波洋三の分類ではFc類にあたる(難波1989)。20~22は陶器摺鉢である。いずれも赤褐色を呈する硬質な焼成である。23は磁器皿で、底部内面にコンニャク判で五弁花を施す。高台には砂目積みの痕跡が認められる。24~25は磁器碗である。26は軒平瓦である。瓦当の半分以上を欠失するが、唐草文が観察できる。瓦当裏面にはヨコナデが施されている。これらの遺物は18世紀頃に属するものと考えられる。

SK01・SK02 出土遺物 (第6図27~38) 土師器皿、陶磁器、瓦が出土している。瓦には図示したもののほかに、棧瓦の破片も少量含まれる。27~33、37は磁器碗である。34は陶製の徳利で、内面は無釉である。35は皿で見込みを蛇の目軸にぎする。36は京焼風の陶器蓋で、胎土は黄白色で緻密である。外面に細かい貫入のある軸がかかり、宝珠形つまみを持つ。38は丸瓦で、全体の3分の1が欠失している。凸面は縦方向にミガキをおこない、凹面にはコビキB技法(森田1984)と布目の痕跡が明瞭に残る。玉縁部はヨコナデで仕上げている。これらの遺物も石垣 SX01 出土遺物と同時期の18世紀頃のものと考えられる。

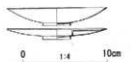


第6図 SK01・SK02 出土遺物



第7図 自然河道出土遺物

自然河道出土遺物(第7図39~41) 自然河道からは須恵器片と盃状の銅製品の3点が出土したのみである。39・40は第Ⅲ層から出土した須恵器甕か壺の胴部破片である。外面には格子タタキ目、内面には当て具痕による青海波文が観察できる。41は第Ⅲ層上面から出土した盃状の銅製品で、完形だが器形に歪みが生じている。口径は最大で6.4cm、現存高3.1cmで底部に低い高台がつく。器壁は厚さ1.5mm程度で均質な仕上がりにある。口縁端部内面には面取りがみられる。文様や沈線などは認められない。41については、法隆寺所蔵の伝世品のなかによく似たものがある。法隆寺昭和資財帳第12巻一供養具372(第8図)は火皿と器台を組み合わせた盞燈(燈明皿)であるが(法隆寺昭和資財帳編集委1993)、その火皿の法量や形状が類似することから、41も同様の用途のものとする。ただし、41には煤の付着などの痕跡は認められない。法隆寺伝世品は18世紀以降の製作と推定されており(毛利光2005)、本例も同時期のものとみてよいだろう。

第8図 法隆寺所蔵伝世品
(昭和資財帳第12巻 供養具372)

V. まとめ

今回の調査では、江戸時代後半以降の遺構を検出したほかは、顕著な遺構は認められなかった。調査地のすぐ南側には黒塚古墳が隣接するが、関連するような遺物も出土しなかった。

そのなかであって調査区東端で出土した石垣は特筆すべき遺構である。石垣の位置と方向から、調査地の西方には石垣に関連する遺構が存在するとみられる。調査地の約60m西方には上街道が南北に走っており、今回検出した石垣は上街道沿いに展開した村落の一端を示すものであろう。石垣の築造時期は出土遺物の様相から近世後半頃と考えられる。井戸の廃絶も同時期と考えられ、それ以前には土地利用の痕跡がとくに認められない。既に述べたように、19世紀中葉には石垣築造などの土木工事により柳本藩邸が再編されたことがこれまでの調査によって明らかになっているが、これに先行する時期に近世柳本が黒塚古墳北側に拡大していった可能性が考えられる。

調査区内で検出した河道については、河床を確認できなかったため不明な点があるものの、竹ノ尻地点第1次調査区の南側で確認した河道の downstream 部分にあたると思われる。黒塚古墳の位置する尾根の北側には埋没谷の存在がかねてから想定されていたが、今回河道を確認したことでそれを裏付けることが

できた。この河道は遅くとも近世後半には完全に埋没している。現在は龍王山麓の緩斜面に位置する柳本であるが、かつては谷地形と尾根地形が入り組む起伏に富んだ景観を呈していたことが窺える。

柳本藩邸遺跡内では今後とも小規模な開発行為が主体になると思われる。今回のような小規模調査の積み重ねにより、柳本藩邸の変遷、近世柳本村落の発展過程などといった課題を明らかにしていかなければならない。

〔参考文献〕

- 難波洋三 1989 「市販の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
 法隆寺昭和資料編集委員会 1993 「法隆寺の至宝—昭和資料編—」第12巻 小学館
 毛利光俊 2005 『古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』奈良文化財研究所史料第71冊 奈良文化財研究所
 森田克行 1984 「畿内における近世瓦の成立について」『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第14冊 高槻市教育委員会

〔挿図出典〕

第8図 毛利光 2005 PL.5

第6表 出土遺物観察表

号	器種	色調	胎土	焼成	法量	残存率 (口縁)	出土地点	備考
1	小皿	2.5Y6/2灰黄	密	良好	口径6.0 器高1.2	完	SK01	
2	小皿	5YR6/4にぶい黄	密	良好	口径6.4 器高1.4	完	SK01	
3	小皿	5YR6/6橙	密	良好	復元口径6.9 現存高1.5	1/3	SK01	
4	小皿	7.5Y6/6橙	密	良好	復元口径6.6 現存高1.3	1/3	SK01	
5	小皿	2.5Y6/2灰白	密	良好	復元口径8.0 現存高1.5	1/3	SK01	
6	小皿	2.5Y6/2灰黄	密	良好	復元口径8.4 現存高1.4	1/4	SK01	
7	小皿	2.5Y7/3黄	密	良好	口径8.8 器高1.9	完	SK01	
8	小皿	2.5Y7/2灰黄	密	良好	復元口径9.4 現存高1.7	1/5	SK01	
9	小皿	2.5Y7/3にぶい黄橙	密	良好	復元口径10.6 現存高1.3	1/6	SK01	
10	小皿	5Y6/3オリーブ黄	密	良好	復元口径12.4 現存高1.8	1/6	SK01	
11	小皿	2.5Y6/3にぶい黄	密	良好	復元口径13.0 現存高1.8	1/4	SK01	
12	小皿	2.5Y6/3にぶい黄	密	良好	復元口径13.9 現存高1.8	1/5	SK01	
13	炆埴	5Y6/3オリーブ黄	密	良好	復元口径24.2 現存高6.1	1/12	SK01	
14	炆埴	10YR5/3にぶい黄橙	密	良好	復元口径26.2 現存高4.2	1/12	SK01	
15	炆埴	10YR5/2灰黄橙	密	良好	—	—	破片	SK01
16	炆埴	2.5Y6/2灰黄	密	やや良好	—	—	破片	SK01
17	炆埴	10YR6/3にぶい黄橙	やや密	良好	復元口径29.2 現存高5.2	1/12	SK01	
18	炆埴	2.5Y6/3にぶい黄	密	良好	復元口径32.0 現存高3.9	1/12	SK01	
19	炆埴	2.5Y6/6明黄褐色	密	良好	復元口径29.4 現存高5.3	1/12	SK01	
20	摺鉢	2.5YR2/3暗赤褐色	密	良好	復元口径33.6 現存高7.3	1/12	SK01	
21	摺鉢	2.5YR2/3暗赤褐色	密	良好	復元口径26.8 現存高3.3	1/12	SK01	
22	摺鉢	5YR3/3暗赤褐色	密	良好	復元口径26.3	1/12	SK01	
23	碗	6YR8/1灰白	密	良好	復元口径12.6	1/4	SK01	
24	碗	2.5G7/8/1灰白	密	良好	復元口径10.5	1/8	SK01	
25	碗	7.5Y7/1灰白	密	良好	復元口径7.3	1/3	SK01	
26	平瓦	10YR5/1黒灰	密	良好	—	—	破片	SK01
27	碗	5G7/8/1灰白	密	良好	復元口径9.6 器高4.8	破片	SK01	
28	碗	2.5G7/1明オリーブ灰	密	良好	現存高3.4	破片	SK01	
29	碗	N8/0灰白	密	良好	現存高3.8	破片	SK01	
30	碗	2.5G7/1明オリーブ灰	密	良好	復元口径7.4 器高3.8	破片	SK01	
31	碗	2.5G7/6/1オリーブ灰	密	良好	復元口径8.3 現存高3.6	1/6	SK01	
32	碗	N8/0灰白	密	良好	復元口径8.8 現存高3.4	1/6	SK01	
33	碗	7.5Y6/3オリーブ黄	密	良好	復元口径10.8 現存高4.0	1/8	SK01	
34	甕	2.5Y3/2黒褐色	密	良好	現存高4.6	破片	SK01	
35	甕	2.5G7/8/1灰白	密	良好	復元口径7.3 器高4.0	1/3	SK01	
36	甕	N4/0灰	密	良好	受部径4.5	完形	SK02	京地風
37	甕	2.5Y8/2灰白	密	良好	復元口径7.4 現存高5.4	1/6	SK02	
38	丸瓦	2.5G7/8/1灰白	密	良好	—	2/3	SK01	
39	須臾器埴	2.5Y7/1灰白	密	良好	—	—	破片	Ⅲ層
40	須臾器埴	2.5Y7/1灰白	密	良好	—	—	破片	Ⅲ層
41	瓦状新製品	10YR3/2黒褐色	—	—	口径12.2 器高1.8	完形	Ⅲ層上面	蓋物(御明屋)小

平等坊・岩室遺跡(第30次)

I. はじめに

平等坊・岩室遺跡は天理市中央部、布留川扇状地末端の沖積平野に立地する東西約400m・南北約600mの大規模集落跡である。調査は今回で30度を数え、弥生時代の拠点集落としての性格や、環濠集落の成立から拡大、終焉、古墳時代集落への移行に至る一連の変遷過程が明らかにされてきた。

しかし既往の調査では遺跡北半で多くの成果が挙げられているのに対し、南半の様相はほとんど分かっていない。今回の調査は遺跡南東部の様相を把握することを目的として、岩室町223番地の休耕田に南北11m・東西5mの長方形の調査区を設定した(第9図)。重機により耕作土を除去したのち人力掘削に移行し、調査途中で北側に3m拡張したため、最終的な調査面積は約70㎡となった。調査は平成19年2月19日に開始し、3月19日に全ての作業を終了した。現地調査中、当初のトレンチ北半を北区、南半を南区、北側へ拡張した部分を北拡張区と称したが、報告においてもその呼称を踏襲する。なお、遺構の実測等に際しては日本測地系による国土座標を利用した。

II. 調査の概要

1. 層序(第10図・第11図)

第Ⅰ層は厚さ約60cmの耕作土で、上からオリーブ灰色シルト・暗灰黄色シルト・灰色粘質土に細分され、灰色粘質土は素掘溝の埋土となる。第Ⅱ層はにぶい黄褐色ないし黒色の砂質シルトからなる厚さ10～20cmの遺物包含層である。第Ⅱ層を除去した後、第Ⅲ層上面で遺構検出を行ったところ、弥生時代中期末～後期前半の遺構を確認した。第Ⅲ層は厚さ10～20cmの明黄褐色砂質シルト～粗砂層である。第Ⅲ層を除去すると、灰色～暗灰色粘土の地山(第Ⅳ層)となる。地山上面には弥生時代前期前半の水田状遺構が営まれ、白色粗砂ブロックを含む黒色粘土層や青灰色細砂層が部分的に乗る。

調査地点では、特に南側で耕作による第Ⅱ層の削平が顕著で、第Ⅰ層直下に第Ⅲ層がのぞく部分もあった。調査区南側に微高地が存在し、北に向かって緩やかに落ちていく旧地形が想定される。調査区北側の低地を挟んで、環濠集落が立地する微高地へ移行するものと思われる。

2. 遺構と遺物

今回の調査では、第Ⅱ層上面で中世、第Ⅲ・Ⅳ層上面で弥生時代の遺構検出を行った。第Ⅱ層上面では条里地割に沿った南北方向の素掘溝群を確認した。

以下、第Ⅲ・Ⅳ層上面で検出した各遺構・遺物を概観する。(第10図～第13図)

溝 SD01

南～北区で検出した幅25～40cm、検出面からの深さ10cm前後の溝である。北西～南東方向に走り、両端は調査区外に伸び、北半でSX01を切る。埋土は黒褐色砂質シルトで、弥生時代中期末頃の土器片を少量含む。1・3は壺である。1は口縁端部を下方へ拡張し、端面に3条の凹線を施す。口縁端部近くに2箇所穿孔がある。3は口縁端部を主に下方へ拡張し、上方にもわずかに拡張する。口縁端部面に凹線は見られない。2は鉢か。口縁端部面に1条、口縁端部直下外面に1条の凹線を施す。

溝 SD02

南区南西隅で検出した溝である。SD01とほぼ並行するか。幅40cm以上、検出面からの深さ8cm前後を



第9図 今回の調査地と既往の調査地点位置図(数字は調査次数を表す)

測る。埋土は黒褐色砂質シルトで、出土遺物は土器小片一点しか出土せず、時期は不明である。

溝 SD03

南区で検出した幅 30~100cm、検出面からの深さ 10~18cm の溝である。東側で急激に幅が広がる。埋土は黒褐色砂質シルトで、弥生時代後期前半頃の土器片を含む。

4 は完形の小型鉢である。全体をユビオサエ及びナデで成形し、下半に下から上へのケズリを施す。底部は突出し、口縁端部は丸くおさめる。胴部は半球状を呈する。

溝 SD04

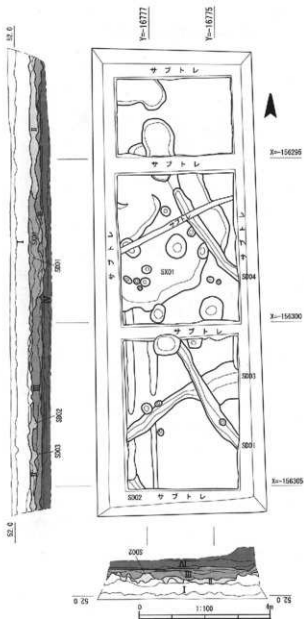
北区で検出した幅 30~40cm、検出面からの深さ 10cm 前後の溝である。SX01 の東肩を切り、北区内で終わる。SD01 とほぼ並行する。埋土は灰色シルトで、弥生時代中期末頃の土器片を含む。

5 は小型鉢か。球状の胴部からくの字状に屈曲する短い口縁部を持つ。6 は甕である。胴部からくの字に屈曲して直線的に短く立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張する。端面に 2 条の凹線を施す。

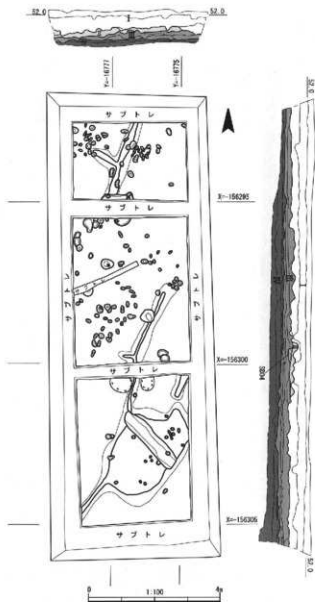
落ち込み SX01

北区で検出した落ち込みである。南北 4.5m、東西 4m 以上、検出面から

の深さ最大 18cm を測り、西端は調査区外に伸びる。底面に数基のピットを伴うが、その深さは 6~20cm 前後である。埋土は上から褐色系の砂~砂質シルト、灰色~オリーブ灰色の砂~砂質シルトであり、南側では最下層に灰白色砂ブロックを含む灰色粘土が堆積する。弥生時代後期末の土器片と板状鉄斧が出土した。7~13 は下層遺物、14~24 および板状鉄斧は上層遺物である。ただし上層は掘削時には第 II 層と区別しがたく、断面観察によって初めて区別し得たものであり、上層の遺物の中には北区遺物包含層に由来するものも含みうる。いずれにしても土器の時期幅は弥生時代中期末に限られ、板状鉄斧の所属時期が SX01 の存続時期と大きく離れるとは考えにくい。



第 10 図 上層遺構面平面図および西・南壁断面図



第11図 下層造構面平面図および東・北壁断面図

る。18は口縁端部を上方へ拡張する。19は高環である。水平に広がる口縁部から端部が垂直に垂下する。20~23は壘である。20は頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部を上方に拡張し、端面に3条の凹線を施す。21は丸みの乏しい胴部からくの字に屈曲して短く広がる口縁部をもつ。口縁端部を上方に拡張するが、さほど幅広の面をなさない。22は張りのない下ぶくれの胴部からくの字に屈曲して短い口縁が立ち上がり、端部を上方にわずかに拡張する。23はやや張りのある胴部からくの字に屈曲して短い口縁になり、端部には刻み目が見られる。外面は下半に縦方向のケズリ、上半に横方向のナデを施したのち胴部最大径付近に左上がりのナメハケを施す。胴部最大径よりやや上で、3条の列点紋が見られる。上の2条は3本1単位の櫛状工具で施紋したと思われるが、列点のラインは整わず波打っている。

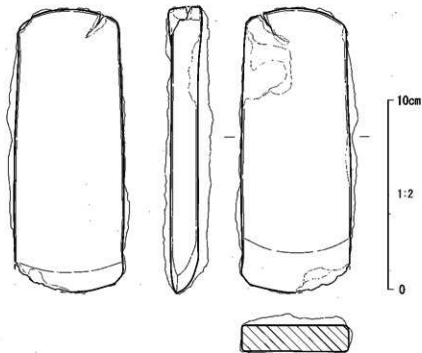
7・13は鉢である。7は外傾して立ち上がる胴部から内湾する口縁を持ち、口縁部外面に凹線を3条施す。13は内傾する口縁部を持ち、端部は内側に拡張されて水平面をなす。外面に4条以上の凹線を施す。8~10は壘である。8は大型の壘で、丸みを持つ胴部からくの字状に屈曲して直線的に立ち上がる短い口縁部を持つ。口縁端部は上下に拡張し、端面に2条の凹線を施す。屈曲部の下側には内外面ともにナメハケを施す。9は丸みを持つ胴部からくの字状に屈曲し、内湾して立ち上がる短い口縁部を持つ。口縁部は肥厚しない。10は口縁端部を上下に拡張し、端面に2条の凹線を施す。11・12・14~18は壘である。11・12は外傾して立ちあがる頸部からほぼ水平に口縁部が開く。口縁端部を上方に拡張する。14は垂直に立ちあがる頸部から口縁部が水平に開く。口縁端部を上方に拡張し、端面に2条の凹線を施す。15は斜めに開く口縁部片で端部を上下に少し拡張する。16は斜めに開く口縁部を内向きに拡張し、端面に凹線を2条施す。17は垂直に立ちあがる頸部から口縁部が水平に開き、端部を上下に拡張する。

底部は平底である。24は甕ないし壺の底部である。

第12図は板状鉄斧である。長さ15.0cm・最大幅5.7cmを測る大型品である。詳細は付論に譲る。

第Ⅱ層出土遺物

先述のように、第Ⅱ層は調査区北側で厚く、南側ではほとんど残っていない部分もあった。北区の第Ⅱ層は掘削段階でSX01上層との区別がつけがたかったため、ここでは北拡張区遺物包含層の遺物を提示する。



第12図 板状鉄斧実測図

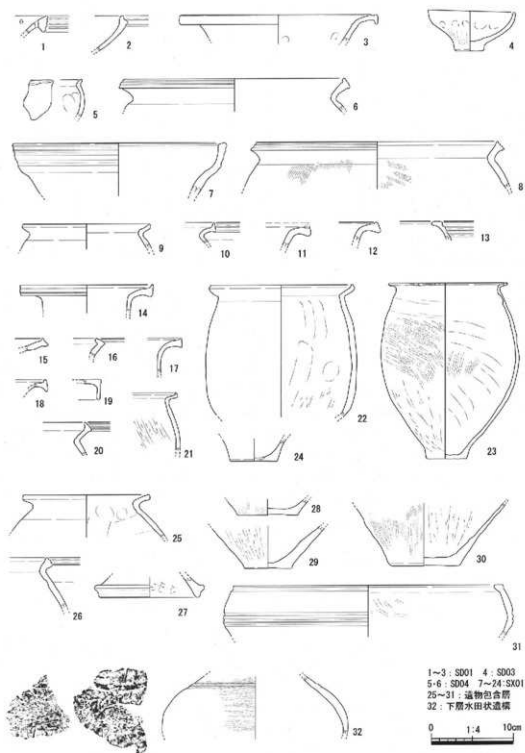
25・26は甕である。25はやや肩の張る胴部からく字に屈曲して短く開く口縁部を持つ。端部は肥厚せず面を持つが、刻目や凹線はみられない。復元口径15.0cm。26は丸みを持つ胴部からごく短く屈曲して口縁部となる。口縁部は端に近いほど厚く、端面に2条の凹線を施す。27は高環の脚部である。端部を上方に拡張し、端面は凹線状を呈する。内面は左上がりにケズリを施す。復元脚部径11.6cm。28~30は壺ないし甕の底部である。28の外面にタテハケ、29の外面に縦方向のミガキが認められる。30は外面にタテハケ、内面には同じく縦方向(下から上)のケズリを施す。底部径は28が7.0cm、29が5.6cm、30が7.8cmである。31は無頸壺か。口縁部は外湾しつつ内傾し、端部を内側に拡張する。口縁部外面に1条、最大径部に3条の凹線を施す。

以上、上層遺構の埋土はいずれも第Ⅱ層と酷似しており、断面観察によってもSX01上層を区別することができるのみであった。第Ⅱ層および各遺構からは基本的に弥生時代中期末の土器が出土し、SD03のみ同後期前半の土器(第13図4)を含む。このことから、第Ⅱ層の形成と並行してSX01・SD01・SD04が掘削され、やや遅れてSD03が掘削されたと考えるのが妥当であると思われる。

水田状遺構

第Ⅲ層を除去すると、現地表面からの深さ90cmで地山(第Ⅳ層)に達し、その上面が下層遺構面となる。北拡張区・北区・南区の全面にわたり幅40~50cm・高さ5~10cmの畦畔状の高まりが数条存在し、南区ではこれに連なってマウンド状の高まりが見られる。マウンドの中央には幅40cm・深さ10cm前後の溝が掘られ、あるいは水口状の施設かとも考えられる。畦畔状高まりの走向はN25°-Eおよびこれにほぼ直交する角度である。高まりの間には灰白色粗砂のブロックを含んだ黒色粘土層や、青灰色の粘質砂層が堆積する。小規模なピットが群在する箇所もあり、いくつかは足跡になる可能性がある。

32は畦畔状遺構の検出時に出土した壺の胴部片である。胴部から頸部への境付近に1条の削出凸帯



第13図 出土遺物実測図

をもち、外面は全面に丁寧な横方向のミガキを施す。弥生時代前期後半ごろのものと考えられる。

III. まとめ

平等坊・岩室遺跡第30次調査は、集落南東部における初の調査例となり、弥生時代中期末～後期前半および弥生時代前期後半の2時期の遺構を確認した。その結果、上層遺構検出面では落ち込み状遺構1基と溝5条、下層遺構面では水田状遺構を確認し、現在の条里景観とは異なる弥生時代の土地区画の一端を見ることができた。この中でも特筆すべきはSX01から出土した板状鉄斧と、下層遺構面の水田状遺構である。板状鉄斧は県内で3例目の発見であり、鉄製品としても県内で最も古い段階に属する。板状鉄斧は近畿地方でも弥生時代中期後半から後期にかけての拠点集落や高地性集落で出土例があり、平等坊・岩室遺跡の拠点性を改めて裏付ける遺物である。

下層の水田状遺構は、小面積の調査における地形及び堆積層からの類推であり、今後より広い面積の調査による検証を要する。仮に水田とすれば県内でも古い部類に入り、また今回調査地点の北西方に想定されている前期集落域と耕作域との位置関係の一端を示す資料ともなりうるものである。

第6表 平等坊・岩室遺跡第30次遺物観察表

番号	器種	色調	胎土	施装	法 量			残存率(口縁)	出土地点	備考
					口縁	高さ	底径			
1	壺	7.5YR5/8明褐色	やや密	やや良好				破片	SD01	
2	鉢	7.5YR5/4にぶい褐色	密	やや不良				破片	SD01	
3	壺	7.5YR7/6褐色	密	やや良好	(23.2)			1/6	SD01	
4	鉢	5YR5/8明赤褐色	やや粗	良好	10.4	3.9	5.0		SD03	
5	鉢	7.5YR5/8明褐色	密	やや不良				破片	SD04	
6	甕	2.5YR6/8褐色	やや密	不良	(26.6)			1/6	SD04	
7	鉢	2.5Y7/3浅黄色	密	やや良好	(25.4)			1/8	SX01下層	
8	甕	10YR6/3にぶい黄褐色	やや密	やや良好	(29.0)			1/6	SX01下層	
9	甕	10YR6/3にぶい黄褐色	密	やや良好	(15.4)			1/4	SX01下層	
10	甕	10YR7/3にぶい黄褐色	密	やや良好				破片	SX01下層	
11	壺	10YR4/2灰黄褐色	密	やや良好				破片	SX01下層	
12	壺	7.5YR5/8明褐色	密	やや良好				破片	SX01下層	
13	鉢	7.5YR7/6褐色	密	やや良好				破片	SX01下層	
14	壺	7.5YR5/4にぶい褐色	やや密	良好	(16.0)			1/4	SX01上層	
15	壺	10YR5/4にぶい黄褐色	やや粗	やや良好				破片	SX01上層	
16	壺	10YR 7/4にぶい黄褐色	密	やや良好				破片	SX01上層	
17	壺	7.5YR6/4にぶい褐色	やや密	やや良好				破片	SX01上層	
18	壺	10YR4/3にぶい黄褐色	密	やや不良				破片	SX01上層	
19	高坏	7.5YR6/8明褐色	密	良好				破片	SX01上層	
20	甕	10YR7/3にぶい黄褐色	やや密	やや良好				破片	SX01上層	
21	甕	7.5YR 6/4にぶい褐色	密	やや良好				破片	SX01上層	
22	壺	7.5YR5/3にぶい褐色	やや密	良好	(17.1)			1/8	SX01上層	
23	甕	2.5Y4/3灰黄色	密	やや良好	14.3	21.3	4.9	1/12	SX01上層	
24	甕か壺	7.5YR5/8明褐色	密	やや不良				5.6	SX01上層	
25	甕	5YR6/6褐色	密	やや良好	(15.0)			1/4	包含層	
26	甕	10YR6/4にぶい黄褐色	密	やや良好					包含層	
27	高坏	10YR6/4にぶい黄褐色	やや密	やや不良			11.0		包含層	隣部径
28	甕か壺	10YR6/4にぶい黄褐色	やや密	やや良好			7.0		包含層	
29	甕か壺	7.5YR6/4にぶい褐色	やや密	やや良好			5.6		包含層	
30	甕か壺	7.5YR5/3にぶい褐色	やや粗	良好			(7.8)		包含層	
31	鉢	2.5Y6/3にぶい黄色	密	やや不良	(32.8)			1/8	包含層	
32	壺	2.5YR7/3浅黄色	やや密	やや良好					下層遺構面	

付論 平等坊・岩室遺跡出土の板状鉄斧について

I. はじめに

平等坊・岩室遺跡 30 次調査では、落ち込み状遺構 SX01 の埋土上層から板状鉄斧が出土した。ここでは、今回出土した板状鉄斧(以下、「本例」とする)の各属性について他遺跡の例と比較しつつ、同鉄斧の位置づけを試みたい。

II. 平等坊・岩室遺跡出土の板状鉄斧

刃部右端をわずかに欠損するが、ほぼ完形である。全長 15.0cm・刃部幅 5.7cm・基部幅 5.3cm・最大厚 1.5cm・重量は 358.5g を測る。刃部が基部よりわずかに広いが、両側縁がほぼ平行する幅広の鉄斧である。基部は弧状に仕上げられ、刃部も弧状をなす。

身部はほぼ扁平な板状を呈する。刃部は表裏から研がれた両刃で、研ぎ面は表裏とも弧状を呈し蛤刃状となる。刃面幅は表面が約 2.1cm・裏面が約 1.0cm と不均等で、刃縁は裏面側に偏る。

基部には端面を縦断する剥離があり、そのまま右側縁部へ続き刃部側へ 6.5cm ほど走ったところで終わる。また刃部端の欠損部も、大きく膨れて 2 枚に裂けているかのようである。これら剥離の存在及びレントゲン写真による観察所見などから、本例は折り曲げ鍛造によって作成された可能性が高い。

報文に示したとおり、SX01 埋土および北区包含層の遺物は細片に至るまで時期を検討したが、全て弥生時代中期末の範疇におさまり、鉄斧の所属時期幅を限定して捉えられる。大和地方でこれまでに確認されている鉄器はいずれも後期段階のもので、本例は弥生時代中期段階の大和における鉄器使用を鉄器そのものによって確認し得る初めての例となる。

III. 平等坊・岩室鉄斧の位置づけ

板状鉄斧は全長 10cm 前後を境に大型品と小型品に分ける見方(川越 1974)が現在まで基本的に踏襲されている。本例は大型品の一例となるため、ここでは本例との比較対象を大型の板状鉄斧に絞って、本例の位置づけを考えていきたい。

本項で取り扱う大型品の抽出に当たっては、使用による摩滅や、先に触れた分類でも基準が「10cm 前後」と多少幅を持たせていることなどを考慮して、単純に 10.0cm を基準にすることを避け、便宜的に以下の基準に沿って行った。

- ①全長を知り得るものについては、全長 9.5cm 以上。
- ②基部または刃部が大幅に欠損し、全長を知り得ないものについては、現存長 9.0cm 以上。
- ③板状鉄斧と報告されているもののうち刃部相当部分に付刃されていないものは、検討対象から除外する。

上記の基準によって抽出した大型板状鉄斧は、管見の限りでは第 7 表に掲げた 72 例を数える。なお多少の遺漏はあろうが、ひとまずこれらと比較検討の対象とする。

<地理的位置づけ>

大型板状鉄斧の地域別分布を見ると、近畿地方(摂津・河内・大和・山城) 9 遺跡 14 例、北部九州地方(筑前・筑後・肥前・豊前) 11 遺跡 12 例、関東地方(相模・上総) 11 遺跡 14 例、四国地方(讃岐・伊予・阿波) 4 遺跡

4例、東海地方(尾張・三河・遠江・駿河)6遺跡6例、山陽地方(美作・安芸・周防・長門)5遺跡5例、山陰地方(因幡・出雲)2遺跡5例、中九州地方(豊後・肥後)5遺跡5例、中部高地(信濃)4遺跡4例、南九州地方(日向)1遺跡1例、南西諸島(琉球)1遺跡1例、北陸地方(越後)1遺跡1例となる。近畿・北部九州・関東で出土例が多く、四国・東海・山陽・山陰・中九州・中部高地がこれに続く。近畿地方の一例となる本例は、大型板状鉄斧が多く分布する地域における出土例の一つとすることができる。ただ北部九州地方については、鉄器全体で見れば他地域を大きく凌駕する数が出土していることを考えれば、近畿や関東と同等の例数はむしろ少ない。これは、後述するようにより機能的な袋状鉄斧が北部九州では早い段階から普及していたことと関係すると思われる。

< 時期的位置づけ >

大型板状鉄斧の最古のものは福岡県古大間池遺跡例(第15図3)・長崎県神ノ崎遺跡例(第15図1・2)・山口県綾羅木郷遺跡例(第15図7)の3遺跡4例で、中期前葉に属する。板状鉄斧の最古型式は、前期末～中期初頭の北部九州で船載鑄造鉄器破片を再利用して製作された小型品と考えられている(村上1998a)が、中期前葉段階には先駆的な大型品が存在することがうかがえる。形状から受ける印象では、古大間池例・神ノ崎例が朝鮮半島に見られる板状鉄斧に近く、船載品の可能性が高い。綾羅木郷例は報告書では鍛造品とされるが、村上恭通は鑄造鉄斧再利用品としている(村上1998a)。現物を実見していないが、実測図と写真を見る限りではいわゆる鑄造鉄斧再利用の板状鉄斧に形態が似ているため、ここでは村上の見解に従っておきたい。これらに続くものとしては大分県下郡遺跡群例(第15図9)が中期中葉～後葉とされているが、中期中葉段階の大型板状鉄斧は他に類例がなく、現状では中期後葉に属する可能性が強いとしておく。

中期後葉から末にかけては、中九州・南西諸島・山陽・山陰・四国・近畿・関東地方と広範な地域で大型板状鉄斧の最古例が確認される(川越1974)。広範な地域に一度に広まったのは、板状鉄斧の形態的単純さ及び製作の容易さから、分布の拡大が比較的スムーズに進んだものと思われる。中期末に属する本例はこうした動きの一環と捉えることができる。この段階の近畿地方では、大小の斧など木工具のほか鎌などの小形形器から鉄器化が進むが、主体は依然として石斧・石鎌であり、その中に鉄器が若干の割合で入り込む様相を示す(山田1988)。平等坊・岩室遺跡においても、包含層資料が多いこともあって、前代と石斧の組成が変化するような状況は確認されていない。

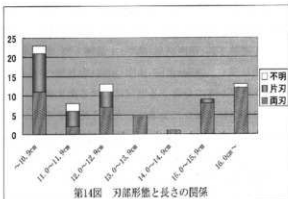
後期段階には東海地方(尾張・三河・相模)、中部高地地方(信濃)、北陸地方(越後)で大型板状鉄斧の出現が確認できる。東海地方では後期前葉までに比定される例が半数を占め、信濃・越後では時期を絞り込める例はいずれも後期後葉である。また山陽地方では、鑄造鉄斧再利用品である綾羅木郷例以外はいずれも後期中葉以降に比定されるものである。一方四国地方の瀬戸内側では中期の例に比べて後期例が少なく、瀬戸内海を挟んだ地域間で対照的なあり方を示す点は興味深い。

中期段階で大型板状鉄斧を受容した地域における後期の動向をみると、近畿地方では全体として後期末までの例が確認できる。現状では地域によって多少の時期的偏りもみられるが、大和・山城では今後の類例増加による変動の余地が大きい。北部九州では、筑前で中期段階に対し減少傾向が見られ、逆に豊前・筑後・肥前の各国では先述した神ノ崎例(中期前半)を除けば後期の例が大半を占める。筑前でも後期例はいずれも遠賀川流域であり福岡平野では確認されていないことと合わせて、周辺地域への分布の拡大と中心地域における衰退という一種のドーナツ化現象がみられる。板状鉄斧より着柄が容易で強固

な袋状鉄斧が、北部九州では中期後葉から生産されたとする考えがあり(村上 1998h)、袋状鉄斧の普及に起因してこうした現象が起きたと考えられる。中九州では例数は少ないが後期末までみられる。山陰・南九州・南西諸島では後期段階の展開が現状では全く不明である。

<形態・法量的位置づけ>

刃部の形態は両刃と片刃に大別され、両刃品が太形蛤刃石斧材質転換品一柄と刃部



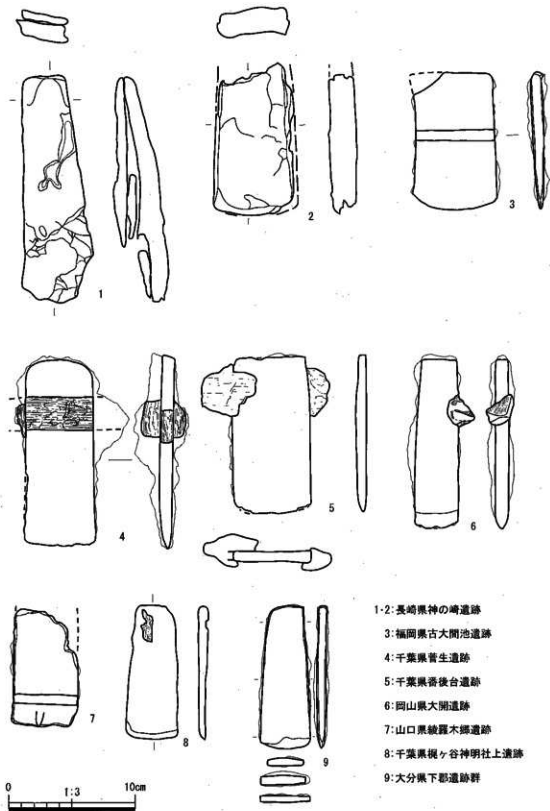
が平行する縦斧、片刃品が柱状片刃石斧材質転換品一柄と刃部が直交する横斧と想定されている(川越 1974・1993)^{*)}。これは刃部の形状からそれに適した作業を推定したものであるが、使用状況をより具体的に推察しうる資料として、柄などの木質が装着状況を判断できる形で付着したものがあつた。大分県下郡桑苗遺跡例(未公表)、千葉県省生遺跡例(第15図4)、同番後台遺跡例(第15図5)、岡山県大開遺跡例(第15図6)、神奈川県梶ヶ谷神明社上遺跡例(第15図8)などがそれぞれであるが、下郡桑苗例・管生例・番後台例・大開例は両刃を呈し、柄の木質は身と80°～90°前後の角度をもって装着され刃と柄がほぼ平行することから、縦斧としての使用が明らかである。梶ヶ谷神明社上例は片刃であるが、木質片の木目が身の長軸と平行に残っており、柄は基部方向へのびると考えられ、横斧としての使用が想定される。これらの事例は刃部形状から用途を推定するうえで重要な傍証となる。一方で、下郡桑苗・管生・大開の3例は両刃品でも刃部がかなり裏面側に寄って付けられており、両刃の中でもやや片刃に近い形状を示す^{*)}。こうした刃部のあり方は本例に共通するものであり、本例も縦斧として利用されていた可能性が高い。

両刃・片刃の別と法量との関係をみると、おおむね全長13cm未満では両刃と片刃が相半ばし、13cm以上になると1例を除き両刃になる(第14図)。このことは大型板状鉄斧の中でも長さ10～12cm台のものでは縦斧と横斧が混在し、それ以上では原則的に縦斧が占めることを意味する。今回は小型品を検討の対象にしていなが、小型品においても一定の値を境に片刃が大多数を占める法量域と両刃・片刃が混在する法量域に分けられることが予想される。この作業によって両刃・片刃が混在する法量域を「中型」として数値上から定義づけることが可能になると思われるが、この分析は後口を期したい。長さ15cmを測る本例は、両刃が大半を占める法量域に属する。

平面・断面の形態に関する研究では、朝鮮半島出土の板状鉄斧との類似性および生産技術の高低から、①基部が丸みを持って狭い、②刃部にかけて徐々に広がる撮形を示す、③横断面が凹レンズ状または凸レンズ状を呈する、④縦断面は身から刃にいたる途中で厚みの最大部を持つ、などの特徴を持つもの

* 川越 1974 では両刃品について「鍔の位置が両側で異り、刃部面の幅(刃から端までの平面上の距離)が異り、したがって断面が変形の始末をなすものが多く、この両刃の形態が、使用による摩耗と再研磨の結果生じたとすれば(研磨の際の無意識の不均一さは考慮外におくとして)、その柄の装着が必ずしも「浅る・測る」のみを目的とした一定のものではないことを暗示させる」とあり、刃部形態と用途との関係は必ずしも固定化したものではないと考えているようである。

* 2この形態について川越 1974 では、「刃を強化するための裏研ぎのほかに、使用の結果この部分が摩耗し、研ぎなおすことから生じた」とし、片刃の一形態であるとするが、本論では両刃の一形態として扱っておく。



第15図 各地の板状鉄斧

千葉県夷隅郡	神奈川夷隅郡市	横田系	CTC住居跡	中期後葉	15.2	3.7	2.0	0.9	1.1	1.0	解次1989	
千葉	神奈川夷隅郡市	横田系	7号住居跡	中期葉	15.9	4.6	3.9	0.9	0.8	0.8	藤岡寺北園遺跡1997	
				中前期	14.6	4.8	4.2	0.9	0.9	0.8		
				中期後葉	11	4	2.9	0.7	0.7	0.8		
				早期後葉	15.2	5.7	5.4	1	1	0.8		
	千葉夷隅郡市	本橋系	藤4江住居跡	V2c 井住居跡	中期後葉	15.1	5.7	5.9	0.9	0.9	0.9	乙茂-大橋1980
					早期後葉	15.1	5.7	5.9	0.9	0.9	0.9	
					中前期	14.9	6.7	6.4	0.9	0.9	0.9	
					前期末	15.1	6.2	6.4	0.7	0.7	0.8	
					中期末	15.1	6.5	5.2	0.9	0.9	0.9	
					前期末	15.1	5.6	4.6	1	1	0.9	
					前期末	15.1	5.6	4.6	1	1	0.9	
千葉夷隅郡市	藤田系	藤田系	藤田系	前期末	15.3	4.8	3.1	1.2	1.2	0.9	三倉町遺跡1999	
				後期後葉	13.9	3.6	2.5	1.2	1.2	0.9		
				後期後葉	13.9	3.6	2.5	1.2	1.2	0.9		
千葉夷隅郡市	藤田系	藤田系	藤田系	後期後葉	13.9	3.6	2.5	1.2	1.2	0.9		

を舶載品、縦横方向とも厚みが均質で明瞭な両刃を持たないなどの特徴を持つものを列島産品と想定する見解がある(村上1998a)。平面形については側縁が反りやくびれを持って広がる撥形、直線的に広がる梯形、ほぼ平行する長方形の3つに分ける見解もあり、川越哲志はこれらをそれぞれ「城ノ上型」「伯母野山型」「菅生型」と呼んでいる(川越1993)。本例は平面形において長方形の「菅生型」に属し、縦横の断面はおおむね均質な厚さを持つことから列島産品である可能性が高いが、基部に丸みを持たせて仕上げる点は半島産と通じるものがあり、やや高度な技術で製作されているようである。

IV. まとめ

大型板状鉄斧は列島内の広い範囲で見られ、中でも近畿・関東・北部九州に多く分布する。列島内では中期後半～末にかけて本格的に登場し、形状の単純さと製作の容易さから短期間で分布が拡大した。弥生時代中期末の所産となる本例も、この分布拡大の動きに伴って大和に流入した大型板状鉄斧の一つである。大和でこれまでに確認されている鉄製品はいずれも後期段階のものであり、本例は中期末段階の大和で既に鉄器が利用されていたことを示す点で重要である。ただ、現状では道具の主休は依然として石器であり、鉄器はその中に少数入り込んでいたにすぎず、鉄器の流入によって石器の組成が変化するように状況は確認されていない。

本例は刃部形態が両刃であるが、刃縁が裏面側に偏っており、片刃に近い。着柄状況がわかる資料の中に、同様の刃部を持ち身と直角(刃と平行)に柄がつくものがあることから、本例も刃と柄が平行につき縦斧(伐採斧)として使用されたと考えて大過ないと思われる。量と刃部形態の関係では長さ13cm未満の資料で両刃と片刃が混在する状況が見られ、長さ15cmを測る本例は両刃品が大半を占める量域に属する。平面形は長方形、断面形は縦横とも均一な厚みをもつ板状で、朝鮮半島出土の板状鉄斧とは異なる単純な形態を呈する。こうした形態の板状鉄斧は、製作技術的にもより簡易な技術で製作が可能であることから、本例は列島内で製作された可能性が高い。ただ基部が弧状に仕上げられている点は朝鮮半島の板状鉄斧に通じるものがあり、稚拙な中にもやや高度な技術をもって製作されているようである。

これまで弥生中期以前の大和における鉄器利用は、木器の表面に残る加工痕など間接的な材料でしか論じることが出来ない状態であったが、今回中期末段階の板状鉄斧が出土したことで、鉄器そのものから直接的に考える材料の最初の一つを提示することが出来た。今後の調査の進展により、徐々に実態解明が進むと思われるが、本稿がその一助となれば幸いである。

(参考文献)

- 愛知県埋蔵文化財センター 2004『長谷口遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第126集
- 天瀬町教育委員会 1989『五馬大坪遺跡』
- (財)印旛郡市文化財センター 1986『千葉県佐倉市第2ユウカリヶ丘宅地造成地内埋蔵文化財調査報告書 上座欠橋遺跡』
- 宇佐市教育委員会 1986『駅館川流域遺跡群発掘調査報告書1』宇佐市文化財調査報告書第2集
- 愛媛大学法文学部考古学研究室 1990『文京遺跡第8・9・11次調査—文京遺跡における縄文時代遺跡の調査—』
- 小値賀町教育委員会 1984『神ノ崎遺跡』小値賀町文化財報告書4
- 乙益重隆・大場舞雄編 1980『上総菅生遺跡』中央公論美術出版
- 粕屋町教育委員会 1977『古大間池遺跡』粕屋郡粕屋町所在遺跡調査報告書
- 金子浩昌・中村嘉次・市毛照 1959『千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査』『古代』第33号 早稲田大学考古学会
- 嘉徳町教育委員会 1982『上櫃遺跡 福岡県嘉徳郡嘉徳町所在住居跡群の調査』嘉徳町文化財調査報告書第3集

- 川越哲志 1974『弥生時代鉄製工具の研究(1)―板状鉄斧について』『広島大学文学部紀要』第33巻
- 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣出版
- 観福寺北遺跡発掘調査団 1997『関勝地遺跡発掘調査報告書』
- (財)君津郡市文化財センター 1994『関西遺跡群Ⅲ』
- 木村彦彦 1988『右京第237次(7ANJNN地区)調査略報』『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和61年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター
- 基山町教育委員会 1977『城ノ上遺跡』基山町文化財報告書第1集
- 具志川市教育委員会 1980『宇堅貝塚群・アカジャンガール塚発掘調査報告』
- 口野博史・高山直人・池田毅・松林宏典・前田佳久・渡辺今日子 2005『伯母野山遺跡の研究―斎藤英二氏寄贈資料の整理報告を中心として―』『神戸市立博物館研究紀要』第21号 神戸市立博物館
- 熊本県教育委員会 2001『梅ノ木遺跡Ⅱ―県道益城菊陽線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査―』熊本県文化財調査報告書第199集
- 坂城町教育委員会 1995『塚田遺跡Ⅱ―長野県埴科郡坂城町塚田工業団地造成事業に伴う緊急発掘調査報告書―』坂城町埋蔵文化財調査報告書第4集
- 佐久市教育委員会 1977『佐久市後沢遺跡調査概報』
- 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1986『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 三条市教育委員会 1999『内野手遺跡・経塚山遺跡』市内遺跡発掘調査報告書
- 静岡県文化財保存協会 1968『清水市石川遺跡発掘調査概報』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『長崎遺跡Ⅳ 昭和62年度～平成元年度・4年度静岡ハイパス(長崎地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第59集
- 下関市教育委員会 1981『鏡塚木塚遺跡発掘調査報告第1集』
- 下埴田遺跡調査指導員会 1985『下埴田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集
- 鈴木重信 1989『権田原遺跡の調査4』『海北のむかし90』港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 高木博彦ほか 1970『川崎市梶ヶ谷神明社上遺跡発掘調査報告』『高津郷土資料集』第7編
- 高槻市教育委員会 1996『古曾部・芝谷遺跡―高地性集落遺跡の調査―』高槻市文化財調査報告書第20冊
- 高松市教育委員会 1989『久米池南遺跡発掘調査報告書』
- 詫間町文化財保護委員会 1964『紫雲出』
- 反野町教育委員会 1974『樋口五反田遺跡緊急発掘調査報告書』
- 田中義昭・石田為成 2000『島根県横出町国竹遺跡出土の鉄斧について』『島根考古学会誌』第17集
- 田原本町 2007『唐古・鏡考古学ミュージアム ミュージアムコレクション36 板状の鉄斧』『広報たわらもと』2007年10月号
- 財団法人千葉県文化財センター 1982『市原市番台遺跡・神明台遺跡』
- 財団法人千葉県文化財センター 1993『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群―一般県道君津平川線原車道道路改良(幹線道路網整備)工事に伴う埋蔵文化財調査報告書―』千葉県文化財センター調査報告書第232集
- 津山市教育委員会 1994『津山市大開古墳群・大開遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
- 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター 2001『矢野遺跡(1)―一般国道192号徳島南環状道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査―』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2001『青谷上寺地遺跡3』一般国道9号改築工事(青谷・羽合道路)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 鳥取県教育文化財団調査報告書72
- 財団法人鳥取県教育文化財団 2002『青谷上寺地遺跡4』一般県道青谷停車場手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 鳥取県教育文化財団調査報告書74
- 豊川市教育委員会 1989『郷中・雨谷』
- 野津町教育委員会 1984『野津川流域の遺跡Ⅴ 大分県野津地区土地改良事業関係遺跡群発掘調査報告』
- 榛原町教育委員会・奈良県立榛原考古学研究所 1977『奈良県宇陀郡大玉山遺跡』
- 兵庫県教育委員会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告書第16冊

- 平田洋司 1997「加美遺跡出土の板状鉄斧」『葦火』70 (財)大阪市文化財協会
- 平野吾郎 1987「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鑿先の出土状態について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター 1992「東広島ニュータウン遺跡群Ⅱ」
- 広島市教育委員会 1990「尾沙門台東遺跡発掘調査報告」広島市の文化財第48集
- 財団法人広島市歴史科学教育事業団 1998「梨ヶ谷遺跡発掘調査報告」(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第22集
- 福岡県教育委員会 1971「日上遺跡 福岡県嘉穂郡那波町彼岸原所在遺跡調査」福岡県文化財調査報告書第48集
- 福岡県教育委員会 1984「塚堂遺跡Ⅱ A地区 福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査—一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集
- 福岡市教育委員会 1996「比恵遺跡群(22)—比恵遺跡群第43次発掘調査報告書—」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第453集
- 福岡市教育委員会 1997「西新町遺跡6」福岡市埋蔵文化財調査報告書第505集
- 埋蔵文化財研究会 1984「埋蔵文化財研究会第16回研究会発表要旨 関連資料集1」
- 宮田剛 2004「X XⅩ下部遺跡群確認調査①」『大分市埋蔵文化財調査年報』Vol.15 大分市教育委員会
- 村上恭通 1998a「Ⅲ鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成7年度～平成9年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書
- 村上恭通 1998b「倭人と鉄の考古学」青木書店
- 本村豪章 1972「長野県藤ノ井光林寺裏山出土遺物の研究」『Museum』254 東京国立博物館
- 山口県教育委員会 1992「大將軍遺跡—牟礼団地造成工事に伴う発掘調査—」山口県埋蔵文化財調査報告第144集
- 財団法人山口県教育財団・山口県教育委員会 1990「土井遺跡」
- 山田隆一 1988「近畿弥生社会における鉄器化の実態について」『網下善教先生華甲記念考古学論集』
- 山田隆一 1994「4. 甲田南遺跡出土の鉄斧について」『平成5年度富田林市内遺跡群発掘調査概要』富田林市埋蔵文化財調査報告書24 富田林市教育委員会
- 吉岡伸夫・松井一明 1987「愛野向山遺跡」『日本考古学年報』38
- 若林泰・斎藤英二 1963「伯母野山弥生遺跡」神戸市文化財調査報告6

〔挿図出典〕(すべて再トレース)

- 第15図1・2 埋文研1984 p. 447
- 3 柏屋町教委 1977 第15図8
 - 4 乙益・大場 1980 第61図1
 - 5 川越 1993 第10図5
 - 6 津山市教委 1994 第31図20
 - 7 下関市教委 1981 第292図5
 - 8 川越 1993 第10図3
 - 9 宮田 2004 第173図23

圖 版



調査区全景(東から)



石垣SX01全景(南東から)



石垣SX01完掘(南東から)



上坑SK01・SK02検出
（北西から）



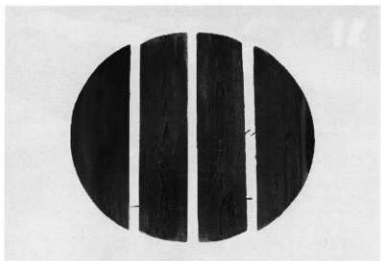
上坑SK01・SK02完掘
（北西から）



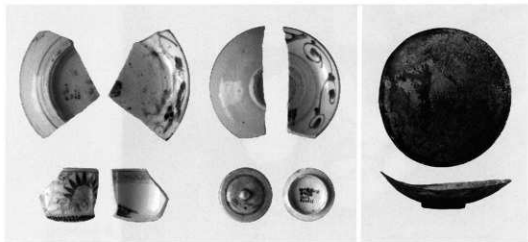
井戸枠



調査区南壁(北西から)

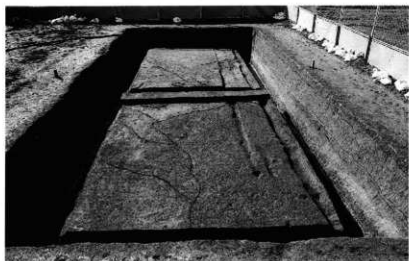


井戸枠 底板



磁器

銅製燈明皿



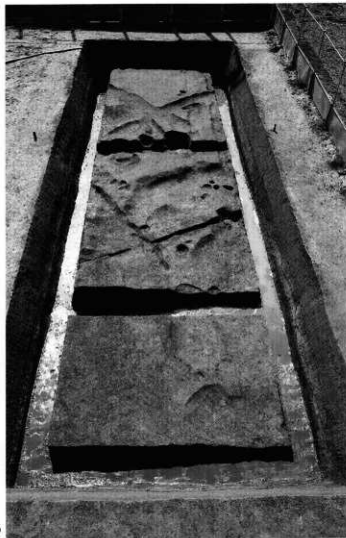
上層遺構検出状況
(北から)



北区北壁土層断面
(拡張前)



落ち込みSX01
土器出土状況



上層遺構完掘状況(北から)



上層遺構完掘状況
(南東から)



上層遺構完掘状況
(北東から)



上層遺構完掘状況
(南区・北から)



調査区東壁土層断面



下層水田状遺構
(南区・南西から)



下層水田状遺構
(北区・南西から)



下層水田状遺構
(北拡張区・南西から)



板状鉄斧全体写真



板状鉄斧刃部拡大写真



板状鉄斧レントゲン写真

報告書抄録

ふりがな	てんりしぶんかひさかちとうきんばう へいせいじゅうはちねんど							
書名	天理市文化財調査年報 平成18年度							
副書名	柳本藩邸遺跡(第11次) 平等坊・岩室遺跡(第30次)							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石田大輔(編集)・北口聡人							
編集機関	天理市教育委員会							
所在地	〒632-8555 天理市川原城町605							
発行年月日	平成20(2008)年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
柳本藩邸遺跡 第11次	天理市柳本町 782、783、784-1	292044	11-D-648	34° 33' 32"	136° 50' 32"	20060807～ 20060824	27㎡	個人住宅建設
平等坊・岩室遺跡 第30次	天理市岩室町アタラシ 223	292044	8-D-318	34° 35' 38"	136° 48' 53"	20070219～ 20070319	70㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳本藩邸遺跡 第11次	陣屋跡	近世	石垣	瓦・土師器・陶磁器	銅製燈明土が出土
平等坊・岩室遺跡 第30次	集落跡	弥生	溝・土坑	弥生土器	弥生時代中期末の板状鉄斧が出土

※1 遺跡番号は奈良県遺跡地図収録の番号を掲載した。

※2 経緯度表示は世界測地系(平成14年4月1日より適用)による。

平成20年3月31日

天理市文化財調査年報 平成18年度

発行 天理市教育委員会
編集 天理市川原城町605番地
印刷 天啓
天理市森本町810番地